連歌茶談續編 全

へ 5
3511
2

門へ利吉
3511
巻 2

大原白雲子なる者ありて歌集
続續編を完成せり前
後續出版せしを以て
就手前後續二編あり此
外に撰し給へる
菜淡の名目意味詳細法紙

万葉活業談子おとゝ出
さたまつゝ書中九おま
むすは業ふまつの巻く
ちゝ詠ひまつゝとゝ行人
紙ふ和ゝ巻ちゝ和学
をゝ行ひまつゝ深切をゝ父母

対幼児を接育まふ如
ゝまを玉光こうかくな馬の
ゝ歌一の所ひあ歌をめて
さをまひく接ゝ存をの
う海をたまつゝ接ゝまふ
ふゝゝて彩ゝ抑ゝ歌と

[illegible]

永義素秋百樂

[illegible]

[illegible]

連歌のよりて来る所をば

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て峰にのこれる雪あきらかにいと
さむき夕ぐれ　海辺雪
うら〻ふる　妻相模者ちかの山もと
野ゆきの池　池水の郷の冬
ゆうべの秋　うつろひ　紅葉
年ふる世道をしらべて名か
夕ぐれ　こゝろ　のこり
十ゝ七夕　月中のうゝに
うゝいのち　ちかの連歌十
発百句　連歌誹諧百六句

世よきこゑてる句と云ひて探題

百詠同茶筅の歌

言葉つゝけて野道の茶結び

しのまてとの茶筅乃うしめて

つゝしみ言葉を侍者にて

きこえんなんと申れ年ふ七ちて

ちらをうこえてをくらるの

くの名のすゝ道をつゝ

うへちていふつよ赤いろい花のと

ふるとつゝのあらさもあはいとをり
こゝろをはなこのらくくとをる
はくゝゝにしりぞいを
のゝちにちん
又故宮きこゆる庚信のゝ

毎月ゝの日 菊 茶 事
春 花園ゟ
ゝゝ

連歌茶談續編

○

大和物語第六に曰深艸のみかどゝ申
なる御時良少將と申す人いとゞき時
よりてをりをりいと色このみなんあり
ける志のびてとたぐひなる女を
なぐうちにかりそめこよひかならず
あたんとちぎりをする夜をそれ女いきう

あさうしてまゝよをともせずめをさ
ましてゝ夜やふけぬらんとたもふほど
よはまうををとのゝたゝれべきくにう
しゝゝと中なるをきゝてたとゝろも
とよふといひあるなる
人をろうしゝゝいまハをのまゝよ
といひやりまゝなるよをどろきて
爰にえゆやとねぞをたよゝる

とぞ付てあるなる志だゝとゝひてう
ちやをみゝる程よねをぞにまるよなん
ありゝるといつり
案ずるよ此事拾遺集よもあり菟玖波
集よも載まゝうしゝゝとゝ拾遺集第
十八巻季吟註よ曰一時を四にわりて
丑一二三四寅一二三四などいふなり
禁秘抄よみえまゝと云云

○金葉集第十雜部より曰連歌

ゆるりろる所乃北の方より雲なま
ゝ来る人れ物いひろるを聞て　永成法師

あ川ま人のこゑこそ北より雲ゆなれ
みちろくにすりこゝよやあるらん　律師慶範

季吟註云みちのくよりこゝ前なる
東に北と對していつるなみちれくに
より越と對してそへて付きり
賀茂の沛社よて物つく音れちけ
るをきゝて　神主成助

去免れうちよる孫乃音こそ雲ゆなれ
行重

いうなる神乃つくにゝあるらん

季吟註云前句を杵を宜祢よそへてな
ぞ付句も神乃人につくなどいふ事あ
るをそへまるべし指合うしろ付いは
比れ沙汰なり昔い吟味せざる事なり

宇治へまかりくるゝ乃よて日比函
のふりそれば水乃出て賀茂川を
男れたゝまをぬぎて手にさゝげ

て渡るをゝ見て

賀茂川をつるたゞよてもわゝる哉　頼綱朝臣

かゝもたゝまをばたしゝと思ひて　信綱

季吟註云前句をそ高くかゝげしを
鶴脛といふなり鴨と鶴とを對してな
ぞ付句も借袴のぬれんをたゝみてと

なり雁と鴛とを對して付るなり

和泉式部かもにまいりるまわらうづよ足をくくれて紙をまた

きりるを見て　神主忠頼

ちくやふる神をびあしまく物ゝ　和泉式部

これをぞ志もろ屋しろといふ

季吟註云わらうづゝ和名屩草履なり

これをぞ志もの屋しろ御祖神を下乃

社といつり須磨卷よ賀茂社志ものみ

屋しろといつる乞なり足ゝ支舞乃下

なりこれを志もれ屋しろといふから

は足よもまぢしいそれよとなり

源頼光ゞ但馬守よてのぶりる

時舘の前にりる川といふ川あり

かみより紅乃くぐりるをしと
そあらるさふらひしてとも世夢
れバたでとや物りてまかるな
をといふを空てはをさひよいひ
るる

源頼光朝臣

たでかる紅乃をくるなりり
られを連歌よりくなすして

あさまる紅からろれ音乃きこゆるい

相撲母

季吟註云志とみる部なりたでも蓼な
を相撲母い頼光妻なり前白きを云
蓼よいひしなるべし付白い唐觴を辛
きといふ伺にそへて蓼かる紅よ付き
るなり

多を筵よ入て付りるゞよこ函

よぬれるを見て　　後人志らす

あふれいるさゞなみもゝにぬれよりかさゝだならいうらすゝやは

季吟註云前句も雑もゝにぬれし事を神なるよなまゝとなり付句の韻を笠よそへてかさゝだならべうくゝあらすゝやハとなりあをかゝるすゝを

にそへてなりといつり

案ずるよ金葉集よりも連歌十九首ありその中ゝゝにらく六首をゝゝに写し載るものなり

○

袋草子第一よ曰連歌ハ本末只任テ意ニ詠之ヲ近代和歌式ニ云連歌ノ不ニ云切ハ口ワロキ事也云云按云不ル可ニ必然ル歟萬葉集ニ云サ

ホ川ノ水ヲせキアケテウヱシタヲヌ又
後撰ニ云シラ露ノヲクニアマタノ聲ス
レハ又伊勢物語ニ云カチ人ノワタレト
ヌレヌエニシアレハ是レ等皆ナ吉キ連歌也
といつり
案ずるに古代ハ連歌ばかりを云切ざる白
ほし近代の連歌ばかりを云切ざる白ハ
わろき事なり

八雲御抄第四ニ曰
情なくうきをとれも〳〵秋はりれ
ふゝき山ゐをいてむ物かも
むかしよをうらみてひえの山にも
れりける人をあるよりてゆりう
いでんといひきりれバかくるめる
なりうちゆゞこと

思ひつくれば殊勝なり博物志といふ書は王隷張衡馬均といふ三人勇を分て山をこえ一人も別事なし一人もやむ一人も死その無爲なるハ酒をのみ居りやそるハものをくひ居りり死ハ物もくはずと云り色を思ふてなさけなくとも求めるなり故人乃説なりといつり

案ずるになさけを酒はいひかけまるこゝろ連歌はもこれあり産衣第三は居るをやをぬて新まんといふ白に立出てなさけをくむる餞別はと宗伊付きるなり

○

愚秘抄本は曰又古れ筆人の書をれて伝る物は皮肉骨れ三斜をはせて三得

三失を當て侍り三跡とも道風行成佐
理この三人乃事なり道風も骨を書て
皮肉れうをかゝず行成も肉の一つ
を得て皮骨の二つをかゝず佐理も皮
乃一篇を存じて骨肉れ姿をかゝず
各得て書狀い得なり得ざるかゝい失
なりそれ道風も筆勢もいはずつよく
たくみまして やさしく愛ある姿をか

ず行成も愛だうりを書てみやさしく
つよきうをえず佐理もやさしれ一
狀を書てつよきと愛あるをぢをかゝ
ずつよきい骨愛あるい肉やさしきい
皮なりは三狀よりまゝ骨をもてな狀
ととべたよやいうに愛もありやさし
き姿侍るともつよれ狀乃なからんい
よもいみじからじとぞ見ゆる人れ具

足よも骨こそまことの根なよて侍れ
されバいづれの乃よもつよ紀をむ孫
とをべき事とぞ教侍るかの三人上古
乃筆跡よてたえなり〳〵輩なれども各
一躰ぞうりをえて三躰をバならべて
書ことなかり紀高野大師ハ御筆ぞ三
躰をつか祢て書きまつるとも中なら
ぬし侍る歌もよかくのごとし〳〵數躰を

えてよむ人ありうづ〳〵さりながらい
づれをもならべてよまむとき〳〵なむ
べきよやんにうくるとかけぬとい似
るべうらずそをのづえやをきかるを
のみまもりてうゝ入よ侍ら無下に手
づなり但上手にならんまでいい
よもをのづえまる躰をなら〳〵て侍な
らふべ紀よや云葉もんも自在よ侍な

れてのち數茸をばうかゝひ伺べきに
こそかの皮肉骨れ三つを十茸よせ
合てゝ得ば拉鬼茸をん茸事可然茸靡
茸これをば骨よなぞらふべし濃茸を
一節茸面白茸この三つハ肉よかゝるど
るべしよや長高茸見様茸幽玄茸これ
三つをば皮乃茸にのぞ免伺るべしは
三茸をいゞれもはるらゝさず使をへ

伺らん歌ぞ大師の御筆よりかなひ伺
づるゝかれば歌人よも筆士よもうゝ
れ茸をえまるたぐひい上古よもまめ
しをくなく當ぬもつやく伺らずと
ぞ歌を使よりつ祢による詩をゝく
ろにかけて詠吟せよ詩をゝくろを高
くをまをものなり蘭省花時錦帳下廬
山雨夜艸菴中この詩をぞ亡父もつ祢

よ高吟せられしゝよ人麿乃歌ぞ万葉れ
中にてもをぐれてゑゝも同姿れ歌よ
ゑゝ伝る古今より以来元久の撰集ま
でも集ごとにおひうなひてゑゆこわ
き歌よよせぬれバこわくれこえやさ
しきにそへまれバやさしくきこえ萬
姿をしなれぬたぐひよやされバ樂天
れ詩と人麿乃歌い同事なり樂天乃詩

も和漢れ詩にうよつるとやら葉よと
れによをれバよはくつよれよよをれ
バともよつよきなり上にヤきる皮肉
骨れ三弥をならべて書たまつる高野
大師乃御筆も義之にならぶれバそれ
よもをぐれ日本人れ筆よあををれバ
ゑその様にゑゆ和漢古今をか称まま
つりとみえまりされバ筆よも高野大

師歌にも人麿詩よりも樂天こそ見侍る
といつり
案ずるに連歌よりも皮肉骨れ三躰あり
至要抄より曰皮肉骨れ三躰の事
皮乃句
人と秋とに秋ふるつあり
萩原や蕭も風乃夕よて
肉の句

はらむるまにも袖れわふなり
尾花咲野遠乃兎れ月を見て
骨れ句
氷とみるい洲なりろろ
池をき汀乃磬れ羽をおきて
巳上

○

三五記本より曰古集より秋ほそ〻だを

をよみ冬鹿をもなゝせりゝゐゐゐ乃事
さらに後世からず
又玄の題は秋乃ものをよみならべ秋
れ題は玄乃景物を引よせる事ゝれさ
らく甚要なうる世〜
又まゝことに名誉あら羅題どもをわ
ざと異名をもと免て鹿をとなとよゝ
草をさぬゝづまとつゝり萩を鹿なく

艸とよまんとこのむ事その詮つやく
ゐらず
又牡丹ふゝそぐさ紫菀れは乃志こぐ
さ蘭ふぢぞゝまか世ゝ乃夢れよみの
物を異名ならでいゝなふ世からず
同末は曰廻文歌といふ事
むら草はくさの名いもしそなはらい
なをしも花乃さくに咲ら羅

うち返してよゝ見べきもとの歌よて
ゆるなり廻文歌にふるつけをゞあ
る今乃歌れ面うるもとの歌よきこゆ
る歌られいいと大事なりまゝさゝさ
まにおぼ返してよむとれもとの歌よて
きなくて別乃歌れてろをゞを撰
をへきるも廻文歌とヤなり順逆よ二
首の歌なるゑし次よ沓冠歌とヤ事付

至十字を歌乃五句れ上下にをきてよ
めるなり
あはせたきものをこ
とゝゝ十字を置てよ名る歌
なゝさゝもはていゆきてれせきもいを
きれ祢てとひこきないうへさ

巳上

續草庵集第四より曰 在中ちゞのならざ
まゝころ兼好ゞなりより紅たまへぜ
にもほゝとゝいふ事をゝゝうふりよを
きて
よもきゝゝ紅さゑのうりほたまくらも
ま袖も秋より爲てなたかせ
かゝゝより紅をなゝゝぜにをこゝ
るもうゝ紅たくわうせこをていこす

なをさりより者にきもゝとひませ
又廻文歌
とく者ゝ里れたうむら雪志ろゝ
きゆらむかるろとさゝ者くと
同第五より曰連歌
たきのこほりいなをやとくらん
といふ句より
雪もすぎえぬに去い者ゝ れ門

東山に住侍しころ花山院左大臣家花
れころれたしまして庭のをれをつ
みて

つみてぞうつる宿乃をれを
と作られしよ

花ゑてをひとよもぬべれ山里に
中園入道太政大臣家歌合れ時夜よ入
て名ふり侍しに侍子左大納言かへさ

よをわゞ車につくべきすゝやされ
をあらぬ車よつれてうつり侍しに乃
よて

あるひとぬ跡をやゝ名ようらをます
と中をくられ侍しよ
ともに夜ふうきみちよ出ても
一夜をだよもてさりをり
といふ白よ

消る日をやゞてふりつゝ冨士れ雪
東にくゞり侍しぬ友なひきる人足柄
山よて
手にとるむうりてこしをそろる
とゆ侍しよ
峯こるにあしゝがらこゆる足もとに
中務少將爲景朝臣父三位爲理卿爲よ
波路もるゝに啼ちりか郭

と又侍りて人くをそ先て上句をつゞ
て經乃料紙よ去侍しよ
年をへて牧あらそへと和歌乃浦
伊勢れかゝ修行し侍しぬ同行の僧
つしまのわゝらいせにこそきゝ
とゆ侍しよ
山去ろれこまにありしいかゝ川

巳上

○

無名抄下に曰假名書事古人云かなよ
めのうく事ハ歌乃序も古今れうなの
序をなとを日記もれほうぐみのこと
ざまをならふ和歌乃玄葉も伊勢物語
ならびに後撰れ歌のことばをま祢ぶ
物語も源氏にをぎまるものなゝみな
られらをれもをへてうくべれなりい

づれもくかまへてまなれことをを
かゝどとをるなりんのをよぶうだり
いいうよもやはらげうをてちからな
き所をでまなよてうくそれにりて
は祢まる文字入奪れ文字のかきにく
れなどをべみなをてくかくなり萬葉
よも新羅をでえらとうり古今れ序
にも喜撰をべきせとかくられらみな

その他なり又勝命云かなよものうく
事を清輔いとゞを上手なり中よも初
度の影供乃日記いとたゝしくかゝり
花のもとに花乃まらうどをゝりかた
れもとよ柿本の影をうけまりとある
ほどなどことにゆかなれたいう歌う
よかくべたなりといつり

なくさ色草よ曰ある人乃いとくまこ
とやこの光源氏れ物がゝりいうまに
も連歌よも伺をとりてんをとらぎと
ヤ人ありけ事いうぐと予がいもくけ
物がゝりん伺幽玄をきはむことよい
和歌の難題連歌乃付よくきいふるた
物がゝりれんをまとを事一弁なる屋
しいとゆる生田の川よ多乃ぬいとい

ひゑぢれもしがきかたつゑてといふ
がごとし源氏れうをよめる歌古
来れほし徒歌そらよれぞえず後京極
攝政

白露乃情をきあることのしや
ほのくみえしゆふかの花
ちかきせよき等思あ人ゑといふ題よ
て大膳大夫高秀

あやにくよ雲井の雁れ来る秋や
れちもの霧も袖ぬらさらん
めれなるべし
故法音寺入道殿
つかふひとよぞしたものある
といふなよ
初瀬路やれたすしてぞりれ中つる

れ一行白紙にして前なられなきなり

といふなやらんよ

夕暮れうへよ雲井乃雁なきて

うれみなんをまたぜりとやぬべし唯

今たもひいぐを半なり徒歌いくらも

ありぬ爲しよ彼物ぐうれ歌をうれ

る歌もなりたくよ乃まりのとほそを

稀よあけてといふ歌を定家卿

あしひきの山橋戸を稀よあけて

花こそなるしまれをまりらん

如此一首をやさびなをらへてうろ

えまふべしなど語り侍るにさては

不審なれぬといつる

○

冨士御覽日記よ曰永享四年壬子九月

冨士御覽れ御下向に初の十日京都出

御同十七日駿河國蒲原鬼巖寺よ御下

富士をこしたゞれて曉方より晴て月
もてるよていそぎ御たち同十八日府
中先小田縄手にて御輿をてられ御
覽ゞて前後左右ゞよみあひ御行きい
まゞ荻枝五里ゝ程なにといなくつき
へく山も川もひゞれわたりるを
なん御富府をなはち富士御覽れ亭へ
をぐよ御あゞりなりて

富士をはいうよ見ひたる〳〵をこ云の景も
れよをぬふ〳〵をか称て笑しも

従四位源範政

御うへ〳〵

君う見業ふの雪めよやむうしより
つもりいそ免し富士乃志ら雪

又御前ま〳〵て一杯御連歌御発句

いく秋乃をゞのひうを富士れ雪

御腋

範政

雪もはるまだぬ松のことの葉

御第三

雪晴れ月をなぶるやほらの事

又還御後又改めて御発句

秋さむく富士のねもみ月迄又改

巳上

又云はく記いづこもく次第ならぎみ

えゝ可然なる弱出いて御なをしいて可

然存ゝ法大名御供衆其外其外横衆等

公奉行衆旅芸者がさまなで人も

人下男巳下白米雑事雑具各同じ如式

味細の事ゝ事いくまてもゝ

へども昔れ御太後をもおろしめさせん

者発まてゝ御分國も當國迄まての御

事にてゝゝる其内寺社なる所領御成敗

まあらずいくゝ如式れ御まかなひ御

やゐるや伝大名宿所よりの御風呂湯
殿の御用意御樽代荷代荷美物巳下毎
日れ事どもを臨川坊海什具に物語ゐ
しかゝる面うはれぞえゞ記よてゐきく
昔れことを委しく御ちりゐへば自他
乃忠のほどをもおろしめをべくゐ委
細よ御知ゐて扱御ちりゐなぬ面うに
何事もまゝ大面うはやゐ面ゝら菜大

名よも言下おなゞく御わゝりゐへば
夢にも御供衆外様衆公衆ともの次第
わけく御知ゐて肝要ゐ以一冊よも
細川下野守同右馬頭山名中務大輔な
どへ御供衆と見えゐゝもとむまれ
かゝりゐて無案内のゝまてを夢にゐ
都鄙みぶれてゝんことを何事もく
差異ゐゝなぬ面うにいゐへども昔より

の次第い御存知いていよくいはれ葉ぞ
らんと注いてもよく御座あるべしと
存任中上いうへをぐく物ちり歌一笑
くく八旬有餘宗長といつり
案ぞるに永享四年九月れ冨士御覧記
にもに三本あり一にも雅世卿の作これ
にい和歌れはー一にも堯孝法印れ作
ぱ中にい御徐御和等乃歌あまるなり

一にも今れなり作者をちらずをの
く廣略ありといへども皆一巻づ
なり

○

心敬れ私語上に曰秀逸の発句ゆく
なりけやそふ都を庭乃時雨　太閤
今こを郭公とてとをれうー　同
ふ事嵐もみぢをぬさ乃神無月　救濟

ちるとおもふちりはすぎたる宮ゐ哉　同
あなさうと云日れみがく玉津嶋　周阿
をゞれねの長月のこるゆふ風哉　同
こほりゐる音なすゝ川乃秋れ月　梵阿
をゝ鳴乃あはつれなきを木の葉う那　同
ふきはらふ荻はほの見く夕月夜　満廣
風ゆるく花かゝばしきなしたゝ那　同
つむはまぐ氷をまくくね芹かゝ南　祖阿

松乃葉もぬるゝでゝうれ時ゐ哉　同
云さえて雪ぢにかをむこゝしゝう那　宗砌
もみぢせぬ松をうら風秋もなゝ　同
霜松れ雪乃さくらいあを葉哉　智蘊
長月や山ゐれれ乃ちれしぐれ　同

巳上

○

筑紫道記ゝ曰二毛のむゝしゝう六十

れいまにいきるまでをろうなるん一
筋よひうれて入江のあしれよしの
にまよひ身をうき草れうれしづむな
げき絶ずして移りゆく美うつ乃中
よも時にきさごふ玄秋のあちれもひ
捨ぐさく侍るまくに國くれ名ある所
えまほしく侍る程よ筑波山もたもひ
入さりなく白川乃関の越ぐさしさ

かひをもえ侍らば今を松浦箱崎乃
あらましのそよてたもひ立ぬ支より
過行まくに周防長門乃境をもこえ海
道よて夕月夜れ新れうしを程よ海の
上もなだわりてんをめり取あへず
月よみつ夕しほさむし秋乃海
又過行て赤間関をやとも れわりに
いきる安徳天皇れ御影堂を見侍れば

御うちみつらふさつよゆひわけて
御よそひする事とええて紅乃袴よ笏
をおたまつり御新のにわひ愛きやう
つき御ゑ〻きまへるさまして唯その
代れ御うちとれたぼえてなれ世乃か
ぎはわきれ侍る事なりあやしの身よ
もえまるほど涙をさへぐさし次よ平
家れ人〻乃新あり新中納言知盛修理

大夫經盛内藏頭信基宰相教盛中將資
盛能登守教經等なり女房よりも大納言
のきけれ房をはゞ免て四五人あり中
よも教經武勇のゐをぐれまりうんも
ふしだに見えて
梓弓八ゑ乃汐合よ消ぬ名も
あきれはうなるき沼乃ゑら波
君れ御事きその哀ことのきに及び侍

らでさゝをきぬ彼二位れ尼君の波乃
下に極樂ゆりと行〳〵へきりろんも悲
しさ淡らず偽りれ云の業よゆれど
唯心己身れろろを思へをいげれゝ
浄土にあらざる誰ゝ佛狩よにらざらん
此ことばぞ微乃乃よゆるべきなり
又下総守能秀れ行よあるゞごと孫む
ごろにしてやゞて一業よ乗ゞて漕出

安德天皇行宮れ沿をあちれゝ柳ゞ浦
を過菊の高濱をながむ同行れきく処
ゆれば紅乃中よて一ゆあり
花ならぬ真砂もきくの濱洛ゝ那
移りゆきて筑前國若松の浦といふに
芸ぬこの所を知人麻生れなにゞし兄
弟ある寺よむゝへとりぬかゝ山ゝげ
で植木るき陰よりうちとの海をろる

に法師のあふり言わるり入日うげよ
稀ふほどまるいふかるさなり此二人も
將軍家をこれ人にはれば都乃物語こ
まやうよーていろくれ者求免出を
るほどこよろだのいそがもーさもれ
もひやられ盃かさなりさーゐる月乃
光もきくならず今夜ハ十三夜なれば
とて発句を

名やれもふこよひ時雨ぬ秋乃月
又十六日板の弘相れ知所長尾といふ
に行都より志淺ゥら祢ば爰よてもま
たをろゥならむやいゐ屋ゲて百韻をは
じむ山ふゥれわるりなれば
もみちーて牧ミどりそふ深山ゥ南
又とうく過行程よ宰府聖廟の御社に
至ぬ當社ハ延喜五年乙丑に草創あり

とをん則はゝ〜をるもいす〜へれ御憂
まで思ひ屈られて看經れでえず夢や
みて夢く神のうるゐふより外れ事な
〜西行が去では涙乃といひうんもかく
るゐはや等閑のことといく思ひ侍
れど只敬神れん一をぢにまゐせて
くもてなさゐをさひて秋ろるや
をくられまゝの秋れ夜乃月

浦風の吹上乃秋れれもかけも
波はたちをゝ池乃志ら菊
神や志るをまを生れてもうることの
あらハとれもゝ安〜まれ乃
又次は人九れ木像れそ〜まを拜を
この所則當社乃會所なりと支て
菊を生くむ免に志ゝ〜れ匂ひ哉
此日宿坊はて舍あり

ちりもあへぬ幣をあらしは柿ゝ紅
又廿四日より松は弘相宿願の千句あ
る第十番蓍秋のこゝろを
夕波よゝつるも秋やまゝ乃海
千句を三日に過て明れば廿七日ゑい
きくふりて乃ゝもいくゝと思ひた
まゝれば生の松は荒あらまゝふもま
た過ぬ原ぞりの院主一杉とあやまく

ゆれびまゝの日
秋ふまぬ松乃ゝ
又爰ゝ一村をくれかるゝ
やなぎ乃ある哀なれどゝふい松よ
る外にムゝつるべくもあらず御社に
糸れでい垣ゝ去るる松あり乾なんゝる
しの松なるべし先松よたちより一ふ
さを取ゝぞし祈念いるし

いよ〳〵の法乃ためしよ秋れ霜を
陰にたさ免よ 箱崎乃松
一木よりいうに定めし筥崎や
松はいにしれも神乃志るしを
又俄よ志ぐれめきてあたまくしたる
風に堂ちさえだ木のもとを彩む墨の
紐なども堂くならず見え侍るも杉に
ひうるく哀なるべし翌日れ含よ

松の葉よれなぐ在をふる時函哉
又それより海づらよ出れば則香椎浜
なり殘菓摘あまれ子たもはなら祢で
や人うぎも見えず物さびしきわくり
なり是より野山の中をわけ過まく海
際に出はるぐとえわくしまる程千
里の濱ともいひつべし風はぎしく波
たうして物ふぼそきよちいされ魚

れてろうげに光をえるよ見もまさ
波のトよりも我より大なる魚乃れそる
れほゝらむとえるにうらやましからず
ずまさ見れゝられ波よりもまさがみをえ
れべうちよせられて海よりはなるも
愁なしひうれて海に帰るもよろこび
なしをべて生をうくるたぐひほどか
なし乾物もなし世もまさく苦樂ともに

愁なりけとともりよく身よりもられ伯
れべうらなまし世とい只此貝れからを
やいふべゝらんは浦をとへば蓑草れ
浦といふ古くもうつせ貝をよめれば
くふそもるけうら波乃うつせ貝
身のうしとてやゝくも成らん
又麻生兵部大輔まうけしていろく
のんざしこしかるにうとらず餐白を

と侍れば

逆風もまさぬ木の葉れ船出う郎

又ある人所望よ

いつきかむあーやの月れ夕時ゑ

又七日のあーた船よ乗集人乃迫門を

のがるに平氏れ人くのちげきうん所

ぞと船人のわーへ侍るもいとくかひ

乃事たえがたくなむ豊浦れ渚よ船よ

せて二宮の神主のもとにたどーる屋ど

まやゞて龍泉院明猷律師の坊よりさ

まぬ日頃の旅れざまもまさ都の事な

ども渚ともに物語して船よ舎あり

をうりきてとふ宿過るーぐれう車

巳上

○

兼載雑談ょ曰宗祇初んよての連歌に

古寺よつめる若菜や佛乃座
玉をまく海とやならん我なるる
色等もかゝりまるるなり
一中古れ人の云一座功二懐紙三物語
と誓古乃様をいつり宗砌もすゝへ
して一物語二懐紙三座功といつり
第一誓古よりも人の物語などをよく
学作乃乃をきしまんれんし第二に

よりも連歌懐紙などをえて工夫し第
三よ座功をつ免とをり定家卿の人
れきく中よて俊成卿よ歌乃れふもん
乃事とはれしよ返答せず無奥して
のちにいもれしとをり歌乃といふ
ものも別よ口傳なし名夕乃ものゞ
きりに耳をうきせんこそ工夫なる
べられ歌乃も天竺もろこしの事よ

てもなし佛法王法は上よもなし假名乃ハ一字はうへ斗よてさいゝく
もいらず我作を云出をこそ上手なれとなり作言よ入ぬれば田夫野人
の云は草木鳥獣乃上までも我物にするなり良匠のあしきざいもく
をもあまさぬがごとし

一蜷川新右衛門とて名人なりし其子

連歌よ琴に松風を付きりしにこと
は外折檻ありしなり其後の會よ琴
といふ曲出来てさへきりしにい
かんとして松風を付ぬとまさいさ
先きまへしなりいかも此事成とも
時節よりより物にすりて能ゆべき
となりし事招月和尚ゆたまひてかん
じたまひしとなり

一宗砌云器用も器用よりてとをるなり
上手よりも數寄ゞ劣なり
一後普光園院殿云よき連歌ぜんとれ
もふべからず一生乃中にあしき事
をせぬを連歌士とも上手ともいふ
べし
一宗砌も付句より発句も下手にてあ
まりるとなり

梅ゝ枝花よりかくるゝ老木ゝ那
水まさり梅ちる庭乃色哉かな
見笠れ作も一二裏の発句なり
花ぞ散かくらんとてれ色香哉　兼載
此発句新菟玖波集よ第一乃発句な
りと勅定ありしとなり
一瀧ならば雪より落て山もなし　心敬
此発句を七五れ句と初五文字の濁

こいふ字を云て今三字をつゞと人〳〵
にいたせられしは唯も半といふ字
をくゝざりしとなり
一修行誓古もなき人連歌のともかく
もせられぬきいうまとくばれし返
答に物くもぞしてはこいせられぬ
ものぞとこそ〳〵たまひしなり
一連歌乃あがる時分ならずにくて

いまは故なりあさまし〳〵記事なり
ひろひぬるたぐしへ山よやをらひて
ぬいけれ白様なり其さゝひをよくた
しなむ歟〳〵
一下句を一ふしをゞよ記なり下の句
乃内は二ふしあるはきかにくし風
もゝげくれ舎をふらんなど歟うに
をべしもの字よて人乃宿をとひき

るんあり

一いづくまて連歌をしゝ歌をよむとも
まづ方角を京のんをもちてをべし
一れたなど事なれどもいひうへて別よ
なる事ありいひかへてもたなどん
なるなり事をへむりり大豆をまゝ
りとおうへしていふても同物な
をやきみをとをなれとも同じも

のゝ事うなれども別なるごとくな
る佛師蓑作經師といふをわろし經
師佛師蓑作といふを吟乃よをがご
とし
一宗祇老後よをこえぬ連歌をわざと
せらるゝと人皆んん得をりそれまて
をなしいろくれ自を身をしてあ
らぬ方を案ぜられしゆへなりそれ

をかの門弟ども年わかくて老後乃
作を学びし程に連歌にくていまて
あしかりしとなり祇公れ年ざうり
の句を学ぶくよかるべしとなり
一花にゝつり月ゝ孫まるなどゝ情な
きあうなれども上手れ一ゝどゝる
ゝ面白し
えぐを打人ゝ花よやかくるらん

闇をまいざり れ海士乃月ゝ孫て
ゆ」れならで歳夜もをべし
一花れれそろしきもあり鬼乃やさし
れもなり和歌連歌のていゆ」れ仏合
あうゝをべし
一夢想れ事ト句を見ば面九句すして
義想の句ともに百一句まるべし義
想乃會れ句別ゝ発句に神一句と書

又を御の字をうく事可依事なり神
魚の屬うは見べ可然なり祇をうる
とえべ祇名を可書となり
一心敬語云增阿子に頓阿といふもの
尺八親より上手にて名人なり頓阿
弟子に定泉坊といふ人あり有人か
の法師乃尺八いうの屬うなるとに同し
は頓阿云音色も手も祇よりいまさ

まさり作」去をとり事をするといつり其
謂を頓阿はとひ〳〵に答云祇を世外
の身はて苍色の方なれべ物ごと
は無常れ哀苦を知ぞその觀念はて
吹ほどは人皆れも去ろぎるなり彼
法師を富貴圓滿なる人皆を其人を
去らず然間れも去ろれ所なしといい
つり和歌も連歌も自ごとに觀念れ

ん肝要なるべしとなり

一下手れ誹諧より

王もてはやしをづりこそそれ

えん近もあぶらみがきの院の御所

をづるといふ所より院もあるを院と

いふ字をあらためを事下手なり前句

付句れ所よりことばりをいとをるべう

にをべし色紙の分別をはれ秘事

ども口傳とも可申よや

一わをれても手になむをひそ旅人の

高野乃れくれ玉川乃水

られも弘法大師の御歌なり

一夏の日よ色こ紀山や雲乃影　兼載

は発句を柏木殿をくたまひて秋元

立つる作をとられあるよとのさま

ひしとなり

一　二夢と書くかぬさねよ戸をぬて
基佐ゞ白なり連歌合の白なりしに
皆人勝乃札をおきりしよ兼載哀乃
本意無念なりとて劣の札をう書れ
しに満座かんじるると云云
書たの発書と人乃ゆれをと
かさ祢てこそもえもらえ発　哀
下もえよ思ひさえなん事ふりだよ

あとなき雲乃たてぞかなしき　俊成女
見ぬを哀乃本意とヤされを
身ようきふしを行そきつる
つれなくい秋もといたん中ならて　兼載
哀れ下の白などよ
れめひをつれべあ乃ゆふくれ　心敬
かあうに哀の白ありたきすあ
ま記

一うつゝ夢やまことをたらとらゝ
といふ句は付がゝくてさへ夢り
ゝにうつゝをとて夢やまことを
たらとらん斗よ付よとあり〳〵なり
いさゝゝの事なれども面白ひて
ろもちなり
古郷となるまで人乃まる住て
荻ふく風にきぬゝうの夢　頓阿

れも志ろき感情ある句れゝ云云
なれゝ
一山桜ゝふの書墨をひとり入て　能阿
新菟玖波集の時代は前句なかり
しとなりぬ此面志ろき一句稀なる
べゝとて前句をば作者て入られゝ
となり
一新撰菟玖波集は句數多少異有

るとて相論のさたもげうしは兼
載云秋夕を一夕もは集ゑ不入して
集れいろいをやむべしとありしに
宗祇云兼載と我等が夕不入いは集
れもたろくあるべからずとなりし
となり

一 程遠き中をゆふ屋乃うらみよて
といふ夕ゑ

都れ月に松嶌もが邨
と有人付きりしをんきよく付たれ
ども入過きる夕なり松嶌よても都
もが邨とたいはれべし都を何事も
れもたろくいげくよもまさるべし
などこそいふべくれいうに松嶌さ
こそありとも都乃月ゑひひつん
事あり記んおなりあまの橋立都な

ませばとよ名るも其名所よむらひ
てよめる程よ面白きとなり
一　捨〳〵よの親をぞれもふ峯れ庵
基佐ゞ白なり宗祇やまの奥となを
〳〵きまつり代感情乃淺深よくく
吟味ユ夫をべ〳〵となり
一　苞を見べ人なきゑれ夕ゝ郎　宗祇
心敬五文字を苞きまぐと直〳〵たま

つり
一十月を神無月といふ佐神出雲れ大
社へ十月出仕〳〵きまふゆへなり神
秘よきいざなだいざなみ十月うせ
たまふにより「云」尓といつり
案ずるよ雜談きさまぐのことを
あり免て雜記ゑきる書なり一がき
よ〳〵て惣計二百六十五談あり其中

和歌連歌は談はし今爰に書出八
談を採摘してのせるものなり

○

廻國雑記に曰行印法印といつる者專
順法眼が同朋なりいまへ連歌の席
にて度々逢ひ侍りき杉本より供し侍る
若狭國小濱に志ばらく休て波をなが
めてゝの法印にかけ侍る

かぎ涼しき立る波乃濱ひさに
まさご踏事を慕れむらさ免
と行印法印付句なり
又加賀國白山下向れ杉ふしゝ夕立し侍
るをゝれば
ゆふぎちの雲を志らねれ雷氣ゝ那
又上野國ゝらを川といつる川に鵜が
らをなどあひまじりて侍りゝるを

又て誹諧

ちりもえぬ魚乃こゝろを恥もせで
うのはねゝゝるからを川ゝ車

又武藏野よて殘月をなゞ免て

山遠しゝぬのゝるひろ野ゝ那

又あるゝゝつゝゝ初雁乃夢をさゝて
かをなびて秋風をゝ紀雲路哉

又野外の萩あゝくちりかゝるゝみえ

ゝれゞ遠山よゝゝ木ゝ乃こゞ色づゝ
わゝゝりゝるをゝんて

野邊の萩ちれゞゝと屋まれ綿ゝ車

旅館れ萩をなゞ免ゝりて

萩ゝれゞふるゝゝとちかゝ紀彩端ゝ那

又鎌倉よて第三まで獨吟

雪ふゝしかまくら山乃ほゝ月夜
あさなく 嘉ゞ岡れまゝゝ世

葛は紫乃色づく壁澤水うれて

又筑波山に八重がさ祢といつる靈石

ばりいひをての発句

きてぞ見るゐ紫乃すゝ紀八重ゝさね

又薮澤よて茶を所望し侍り志ぢらく

屋をゝ見るに池よもみぢのちりゝる

をえて

澤水もうげいい千いろは木の紫ゝ南

又さゐの者び濱りゝる鞠古川をまゝ

とをるとて誹諧

まりこ川又わゝる淑やかつり足

又半澤といつる所よ屋どりて発句

水なゝば澤逸をわくやうを氷

又河越といつる所よ月ゝとい武

士乃侍りいさゝ連歌など者ゝなゝ

ゝるとなん者の発句を所望し侍り者

れば云つゝをしゝ〻る
庭乃雪月をしと見る光り東
又大塚十王ゞ同宿十仙といつるもの
連歌ゑ數寄侍りて切くに奥ゐし侍り
〻るとなんある時発句所望しゝれば
待日のゝ山ゑつゝりて雪をそし
又夜面散ゞて月いとたもおろきゑ彩
ちゝく梅ゝかほりゝれば和漢第三ま

で獨吟
まくらゝふ梅ゑ旅ねの床もなし
月　引　古　郷　春
屋ま遠くゝをむ方ゝより雪消て
又宇津宮あゝりの人百韻奥ゐして社
頭ゑ奉納をべき宿願ありて発句をこ
ひ侍りゝれば
ちらぬまゝあらしゃ花れ宮本ゝり

○

北國紀行ゑ曰上州草津の温泉に二七日斗入て病もつかぬ愚作なゞ鎮守ゑ明神ゑまうしまゑ山中をへていろはの出湯ゑうりぬ雲をふむうとゝ松ゑゆる所より淺間嶽の吾いまゞ紀白くつもり初てそれより去もい震乃

うきくにかつるゞごとし
なうをまりにほふうゝの初雪を
あさまの嶽乃梵ゑそゑる
又武藏野ゑ東のさうひ油嶌といふ所
あり此梅さかりに蓋ぞられい北野御
神と宮えしうバ
わをれすい東風吹むをへ都まて
遠くゑ免のくそてゑ梅ゑ香

已上

○

あしきの雲より曰多く良政弘朝臣明應四れとし長月れ中の八日乃夜つねにむなしくなりきまひぬ日かずむらなくうつりゆれて九月もすゑをろぎりになりぬ持經のついでより十三佛乃御名を百ゐれかみにをきて連歌沙汰し

て手向ゆりぬ狂言綺語もぎよを讃佛乘れ因となるべきを

南長月もゝひなき秋乃わゝれ哉

無むしの音ゝれてさむきゆふ露

不ふく風よれでなも袖や志ゝるらん

登ところさゞ名ぬ壁邊乃ゝりふし

于うれものといひしぞまこと旅乃乃

美みをこよをまべあゝれしらめや

也　山水よひとりのをしれこゑをして
于　うをたこほりのむまぶ岩ゥ孫
和　わゝうなる舟さしくだを川風よ
于　うき雲まよひあ光かくるそら
巳下中間れ十一佛乃名をべ略して初
後れ二佛のそをうゝしをくものなり
古　ムなどくしぬ人をもれむらん
久　くもいや〳〵まゝれくゝ山乃みち

于　うしろなるる根よをのく音ハして
左　さるさけぶなりかゝもしゝ乃未
于　うつりゆく水さへうをむまぬよ
保　ゐり江を舟乃いゞる玄れ夜
左　咲まゞる花の玄柳ゥつりえて
津　つきふみやこのゐぞにきはふ

巳上

案ずるゝ新撰菟玖波集ゝ多く良政弘

朝臣はさく免ゆされしゆへとぞ宣え
まり彼集よも七十五日まで入しゝ人なり

○

宗祇終焉記ゟ曰鎌倉ちゝ松所よりして
文月廿四日より千句れ連歌をて廿六
日にてぬ一座ゟ十句十一句などゟ
數も此ところゟいありれもたろきゟ
もあまゝ侍りしぞゝし此千句乃中ゟ

ふのことをむせこそとをれ
といふゟに
八十までいりたのみしられならん
としのわるりいゆく人もなし
といふゟ
老の波いくゝりせばはてならむ
れも〳〵今たのとぢ免乃ゟにもやと
今こそ思ひ合せ侍れ廿七日廿八日此

あ日をてゝよ休息して廿九日に駿河
ゝ國へと出立ぬるよ其日の午刻ごろ
ゝよみちろそらにしてをんぢくといふ
むしたらりあひていうよともあるか
たなくこしををてゝ藥をもちゆれど
もいさゝうのをるしもなをれでいゝ
へせんこうつとゝいふ所よ藤宿をもと
免て一夜をあゝしゆりしに駿河より

ゝむゝへの馬人こしなどもみえて素
純馬をはせてゝりむかをれしゝゝバカ
をえてゝれば箱根山のふもと湯なと
ゝゝ所よつきしにゝれほをりゝりを
こしんよげよて湯づゝなどくひ物語
うちしてまどろまれぬをのくんを
のど免てあををゝゝ山をこゆべき用意
せさせてうち休しに夜中をくる程い

たく苦しゝぎなれゞをしうごゝろ付れ
ば歌く今は義は定家卿は逢まりしと
いひて玉のをよたえなを生えねといふ
歌を吟ぜられしをきく人これい式子
内親王は歌はこそとれもつるにまさ
は生びの千日乃中はありし前日はや
なゝむる月に生ちぞうゝるゝ
といふ日を沈吟してわれを付ゞさし

みなく付はれなどたゝふれはいひ
つゝ燈のきゆるあうはしていきも生
えぬ時は八十二歳文亀二年夷則晦日
又曰それよりありし山路の露を思
ひ出て
消しをの露わくる山路哉　宗長
とつかふまつりゝれゞ
なごり過うきを生との秋風　宗碩

と付られ侍りぬ
又曰比比兼載ら白川関ちゝたあゝり
岩城とやらんいふ所は草庵をむすび
て程もなるうなれば風のつてに学て
世免て終焉乃地をだに見ぬらむと
や相摸國湯なまで来りて文はそえて
かきをくられしも歌この奥にかきく
はふるべし

を忘乃霧もとの事乃ことちりを
大方れ世の世めしまて ちかき別乃
うなしひら身はかるうと れもほゆる
なれし初乃 年月も 三十あまりは
なりにけん そのいすゝ乃 ちゝろさし
大原山にやくをみれ 煙はそひて
のりるとも れまぬへき いのちゝい
同し東乃 旅なら さひたるかに

ふるつれい　意より　の風よ　ありくと
つゆ　れ　枕の　ふる　乃　爰　れとろきあ（す
れもひたち　雄山を　志のき　霧　きえ
ゆをたよとて　きり　ねて　こと　同ふ　ふ
ますりうせ乃　ふる（いうそ　かひなうふる

反歌

をくれぬと歎くもたうないくせ　も
あらしれゆ乃つゆのうれみを

巳上

自然齋は度道中死去彼御紀音れ方く
いくなど弱きまふべくゆ哉披見れ
た免ま注付ゆり

宗長

水本与五郎殿

といつり

又東海道名所圖會第五ま曰

宗祇法師

辞世

たゝなしや露乃林れ事ふりよも
さをそうれぬる身こそうらむる

自画賛　同

うゝしをく我影なうら世のうれも
ゝらぬ翁乃うらやまれぬる

俳諧　同

世よふるゝさらに時雨乃ゑぐり哉

宗祇終焉の地ゝ黄瀬川乃上一里許定
輪寺といふ所なり又箱根早雲寺よも
墓ありといつり
案ずるよ宗長記よゝ此辞世の和歌発
句いられなゝ時節も文月晦日なり此
発句ゝゝなり発句帳よも乃部に載
て東よりぐりとゝ庵室よてとあり
新撰菟玖波よゝ應仁の比あげまに下

まるる時信濃よりてとりいづれも辞
世とそこれをしるよる弱ぬべし

○

宇津山記ニ曰永正のもじめ比此山
家をまくほくて安元ニかさらふい
えにに安元奥州ニ其三月はじ
山さくらもふ色そふかをみゝ南

又卯月ぞうりに所をえさてかさり
ゐうニ草庵をむをびしをり上ニ喜見
庵といふけ所ひさしに庵なるべし其
夏ハ五月ニ

いく若葉はやしもじめ乃園ハ竹

又白川の関ニまたもひたち侍りてむ
さしのゝ花ハかぞり髪乃形来わ夢つ
くゝ下野の國黒髪山ハふもとうゝ乃

宮までくぐりしに那須れ殿原弓矯合
戰寂中えをらず遺恨をくなからず
音よのミきてをうつる秋乃風
吹きにをくれ去ら川れ関
又此旅のそらよても餐白あまる侍り
しなりたきしろ乃去去なの〳〵國木曽
れミ坂をこえ越前國よ弱ちるべき僧
まきに初て七八九ありて十月は

ど免よ若狭路丹波路ふうく雪を去
のぎて霜月に紫野真珠庵よ死上りつ
れぬ一日二日ありて前内府西殿より
御連歌のめしなりて御発白
まちこしや苔よ石苔に今朝の雪
それより日をへだてず連歌のミまて
手も著ぬ正月六日北野の會所奥行よ
あさうをみさゆるをなき光り哉

御孫れよせだうりよや
又牡丹花老人出たまひ玄清宗碩くぐ
るてよにめづらしくれもたろくこそ
ゆりつれまる千白あり発白
さくらさく玄風うほる柳うの
又比良れふもとなる所よりひえよの
ぐりて横川乃一音院よりて
ふうにかひ山ぞありなの事郭云

又京よりれ舎乃中よ
むぢたまのよきく音をるくぬな哉
前内府へ見せたてまりしよ御称美
乃御ふミありしうべ書加へぬ
又伊勢内宮の祢宜舘よりて七夕に
星もあふ彩やいうつを五十鈴川
又武田兄弟弟楯合戦五十日よをよび
歌味方にさまぐ老んをつくしまこ

とよいけもりうちまぜて三月二日二
十余人一人乃恙もなくありぞ紀帰路
よ身延といふ法花堂に一宿寺れ上人
所をよ
雪こほり山やあらそふ玄乃水
玄来て雪氷われさ紀よとうちとけな
ぐれ出る山水のざまよや下れんも
このたび乃一和れとろにもや

又草庵のぎんな安元歳書れりぎく
注文よ
炭二籠 薪 大 把つとふるつ
大根牛房ゥ〳〵へしをぞまり
なよくてもゥ〳〵しをべ紀
草れ庵かぎくく君ゞとろざし
をき所なき年乃られゥ紀
又をべて老といふこと四十より十に

きるとしぐ賀となんいふ事ありと
やふるに歌よ
老らくのこんとありせい門さして
なしと若てあもさらましを
はゝなれおらましごとや
大かさハ月をもめてしこれそころ
つもれも人れ老とをるもの
老をなげく事むゝしいま誰ゝひとし

ゝらざらん
又ハ十余年愚なれ中よも老をれもふ
なを百余なよもをぎぬらんゝし
いとをる老を身ハなどまちつらん
祢ざ免のこさとゞに老乃志るしよて
あもれ身を老てぬされよかゝさばや
志ぐしとも老れしむべき老ならで
なゝくのこゝろを老ゞうらみよて

老を人をてゞくくてや身もてむ
たいをなをあられむ人をはづらしを
目も耳もたいこそ人をかなしられ
いるづらは老のを人乃ゝみすして
たいをてつれゞたい羅ゝをなす
老乃ひゞみやなるもをちなん
ことしとなりてれ白は正月七日は
七十の表をのをつむわゝなかを南

たもひあれわゞ七十乃としれをて
あられはづかしゝ七十乃はて
小侍従八十れ年のられは
たもひやれ八十れ年乃られなれい
いゝをかりゝいめゝ悲しを
年ふゝらぬ人をさのをやいあられ
ともたもひいりはら羅
又そのむゝし都の霊社奈良七大寺高

野れたくゆうしきに此國乃德をも思
てずまうり出て四十年あまりのほど
宗祇といひし閑人なるをさへちなみ
て連歌れ上下とりふだうも安倍し
彼古人京城のほまれありて公武乃も
てあそび人となりて八十余なて過去
し侍りされば我等屋乃あやしれも
のまで時の市會席なもさし出侍し前

をれちがりいうなりうんこのをび京
なても其形象とれもふ事れほうし
なりといつり

○

東路れつとなる曰首途の日を艸庵れ隣
家齋藤加賀守安元一初とありしうべ
辞しぐるくて発句
風なえよいまうつりうん葛葉哉

わうれ踏にたゝふるとゝふ古を思ひ
出きるなるべし
又上野の國新田庄ゟ禮部尚純隱遁
ありて今も靜喜かの閑居ゟ五六日連
歌たびくゝまねゝよづり
露分て独ゝ入るべき柴山ゝ郎
かれより来びくゝのたゝりにつれて
白川のあらまゝしもたもひ立ぬるゝ

ろぢゝりなるべし
又靜喜の発句ゟ
あさぢりも去らでゝぬる小萩ゝ南
萩の発句ゟ
ゆらず若紫の巻ゟやゝる彩雲を去
らでゝぬるものゝ郎と小萩にゝりな
されぬる其奥あさからずぞ二日ぢゝ
ゟ終日閑談わゝれぐゝ社事のゝなる

べし

又佐野の舘より五日ばかりありて舍あ
るを小兒音丸連歌器量なるなり宿れば
るゞ山上筑前守奥行

夢さよりハ葉さへ色付萩が花

きくト葉稀ふとやヤべらん

又室乃八嶋よりてまことにうちろるよ
るさびしくあちれなりおしも秋なり

つふむうりなくて発句よ

紅葉や室乃屋しまれ夕夢ふり

ゆふべ乃夢ふりろさ乃紅葉よやとれ
ぶえ侍るむうりなり

又名月とて連歌を催しありこよひ発
句古来趣向ことつきぬらんうしいく
とれほゆれど去ぬてれ車なれば

月こよひちりむうりに雲もなし

きく時天のうくろばうりなり比奥くく
又音丸小兒の里竹澤山城守宿所よて
奥行
たぐるともんぴ色れ木をゑう南
兒のんあさうらぬ色をよそへ侍るで
うりなり
又さしむうひふくうして五十白づく
百韻あり

植てえぬ秋もあさや花をくれ　静喜
風も寒夢さ庭乃虫の声　宗長
又九月廿五日大守佳例の法樂連歌依
田中務少輔光幸宿すて
きくさ犯てあらそふ秋乃花もなす
則懐紙を越後の陣へとなん濱川並松
別當すて
色うへぬ松をくれゆく秋もなす

その日九月盡なるべし　神無月朔日より
なりぬまゝ発句
神無月里やふるゝ苔の表
此別當俗長野姓石上なり並松上野國
多胡郡弁官府碑文銘曰太政官二品穂
積親王左大臣正二位石上尊氏文系圖
を布留社あり　布留今道
ひゝ光やふしわらねゝ石上

ふりまし里より苔咲にけり
當月異名小表より表へて過ぎ苔れ
表はやとヤでうりなり
又十九日連歌あり発句
さえ〳〵夜の嵐やふくむらされ　胤隆
〳〵ろあるさらしく風情至極せり
庭はうゝちれ雪乃ちつ苔　宗長
発句に景氣ことつきぬれば書く今新

れさまだうりなりといつり

○

宗長手記上巻ゑ曰永正十二年れ冬當
城ゑ八幡を立らるる八幡乃祝発句
うれやをゑこほらぬなゞれ石清水
泰能伯父下野守時茂八幡を守護し當
國同駿州までの沸留守嚴重なりぬる
夏五月下旬か乃城ゑ今川修理大夫氏

親うちむうちるれ節天龍川洪水大海
れごとし舩橋をうけ舩數三百余艘竹
乃大縄十重九重きく陸地ゑ似きり氏
橋れ祝とし千句連歌あり発句
水無月きうち人ならぬ涼くもなし
氏発句今れもへゞみなうち人のわる
ゑうれとやゑうれうり
又誹諧ゑ

をひつかんくとやたーるらん

ゐ殿ひゞまのあとれ有りもち　宗鑑

高野ひゞまのされひ光ごぜ　宗長

愚白き をひつゝむといふん付まさり

ばらんや

碁盤れうへは玄き来にたり

うゞひものすごめりといふつゝり物　宗鑑

紅うきをみをゝくまでき立いらて　宗長

光も愚白つあまさりたべらんゝー

又亀山旅宿野村大炊介玄より雁を

ひとりうゞに入てとりかたるべき者

光とてあり不使うなーされあまりよ

旅宿乃小庭に水を桶よきへせりを

はませいろくーてなゞ事にるま

うり立あーたい歌を柱よかきつけを

れぬ

かりふしも夢をうゝなさそひこん
秋をまのむれ友よあふまて
又大永五年正月七ゝ日龍王殿発句
よて
雪はらちゝ乃梅咲庭のあらしゝ那
ちりゝ乃日とやまゝ乃うぐひす　宗長
あら玉乃とし乃いく春をむらん　同
又七月廿九日宗祇年忌ゝ発句
のこゝつるよやいわをるゝ秋乃月　氏親
朝ゝほゝさきいゝへれ爰　宗長
又長谷寺観音勸請の所長谷堂ある夜
爐火のあやまちをでゝ乃事なりゝを無
事にうちまちてそのころゝひ法樂連
歌ゝ所をれ発句
うゝゝ火ゝ池水こほるゝゝたゝ南
ゝゝゝ火坑變成池れこゝろまでなるべゝ

同下巻ヨ曰下京茶湯とてけごろ數奇
なごいひて四畳半数六畳数をのく
奥行宗珠さ一入門ヨ大なる松あり松
ゆり植れうち清く蒔蔦葉五葉六葉い
ろこきをえて
今年や夜乃あらしを拾ふ初紅葉
此発句かならず奥行などあらまし
一なり

又ハ五日節分れ夜大豆うりを宵て
福きうちへいり豆乃今夜もてなしを
ひろひくや鬼きいげらん
又立春れあ一た
そふすりはいきていのまでくく乃
いそぐかきたなれ八十年れ春
又宗牧伊勢みやゐとて苏子三袋京より
鞍馬海や小豆海やうに入かれ

まゝらぬ事乃籏れ屋どりよ
口のうちさもやうなる事なり
又細字れもの五六十紙老眼を点ぼり
うりをよ文字のうさち多れあとよて
もたうなく筆うち置て獨わらひに
墨筆もつくえ硯もわらふ屋し
まことよ多乃沼よこそあれ
又泰昭この二三年冨士一見まる筑波

れあるうまでト向この六月よ駿府よ
かつりけまく越年などのあらまし俄
東山治部卿法橋泰賢より迎くぎりぬ
をでに四五日中上洛小原兵庫頭高親
二三年和音餞別れ奥行発白さりぐく
さ記さうず祖とたら川をなれ玄　宗長
さになれぬる事乃くれかる　泰昭
ゆきうつり薪こりつむ宿ならん　高親

巳上

○

高野奈詣日記より日根来傳法院よりて
もひつゝ夢ゆゝ
る聖山わうれてこしもことさらよ
のりをつゝへむとすれ堂免うも
錐もみ不動を拜見して
うこれなき身を分てうる姿そと

血れなみゝをもなうしてそ見る
覺鏡上人れ保歌より
羞のうちいゆ免もうつても羞なれい
さめなはゆめとうつとをちれ
といつる續後拾遺集に入るよや号ひ
いでられて
いけさめん現もしらす七十乃
そふたよれたなゝ羞れ世中

又十六日いまだしもとまりてこれより和歌吹上もえ侍れゝしその志るべ侍れば人をもしらせて中侍るべしまた連歌も一座などさまゞくとゝ免中せしゝども もえさらぬこゝて立出侍るほどは発句とてもきりにこひ侍りしゝば筆はまゝせて

時多なく祢ごろなる深山ゝ那

又五月朔日堺にて連歌奥の句をべきよしを切りに中侍りしゝば光明院にて一座ありしに

濱松乃名はやうるへゝ郭公　實隆

みゞゝゝ夜にしき浦なれ夢　肖柏

きゝゝ記を光は月も秋たちて　宗碩

巳上

○

ありまれ乃の記る日木乃葉れ舩のう
ちゑて同道乃人いひをてれ発白所重
しられべとりあへず
漣やまゝむ木の葉乃沖津舩　喜ト
浦まれ山をしぐれゆく雲　盛親
をちゝの色ゑ芦まべ夢さえて　五良
又道芝居士発白所重あれば彼尊翁ゑ
應じて霜月九一日ゑ

色ゑえてにやもぬ花ゝ木くれ雪　喜ト
さえて風を紀まれの名あけ　道芝
おむふをちれ山乃端のどゝゑて　文凡
又十二月十八日の夜於中御門一座御
興行の発白ヤせと作名れべ
あけぞの雪れゝくえむ山もなし　喜
月に色そふまれの色夢さ　中
雁ゞ言もこほる嵐乃さゝゑて　藏

同廿三日の夜月待より又一句

ふる雪乃つもるや年れ末の松　中

山風さむみ峯乃あさ日の夢　藏

いる雲をわとる月れ新をそて　喜

巳上

○

東國紀行より曰慶順とくよりの懇至さ

すがくて艸庵より

別れ路を松を峯より此葛葉ゝ水

又平井加賀守亭より

神無月ちるよゝほてる海邊ゝ南

これも可憐冬景似春花をとあるこゝ

ろよや

又ある人千句奥書卷頭の発句とて所望

と記を本にふるやいく代れ峯乃雪

又十二月廿一日奥書

一花もことしはやさうり宿乃梅
餘花早梅は発句をつかうまつりにく
き様は先達もいつるゝぶよも素を給
えてそこもる木を忘なごいたぬい季
はなりゞさは友なり素はもそれと
もなくて季をつなぐ事は思案はちつ
きそるうへは事なるべしこのんもま
づ手内立素をんはこ免てたゝも一花

ひらられべなどいつる古語をはもへ
ま一輪さはきれどもこの風情者はう
ちはもを盛なりりとはもひなしまる
んなり後に人の語りしは発句素は
やならむゝなどいひしものをとや連
歌も歳はもはらぬものなり唯性ある
んはむゝ〜き作意を領解るは乃
はゝだらす無作意のこゝろはもめは

こ算とやらむうちひろ免なるゆより
ほゝい耳はたちぬるよやあらん若輩は
た免ついでにちるゝ仕り
又元日の発句
さそ〳〵ふみやことはかちる花は春
三日月を拜して
春もなほほの三日月乃雲ぬゝ南
とやまをてまれば乗阿曽をよだれて

春もゝをみよのうるゝ乃端
とつまられて第三をば宮内卿よぞ
かつる雁そこともなみに参りて
など四五人してよひく百韻よや成
ぬらん
又熟海湯治はおふゝ発句
梅ゞ香もわくや出湯は春乃風
又発句當座よ

花は色も香も乃きはにしむ夕ゝ南
きゝ今の景氣なるべし此発句よて一杯
かをみよもるこをれとを乃山
又遠山甲斐守城ようつゝひゐ後日上
総國へ出陣のこと伯ども むりよ一産
懇をれよりあり色く友陸めいわく乃
よ再往なれども不及了簡去うれば
せ先てひるつゝさようばゞ発られよ

うゝなどやて一順はれをめとて筆もと
まあへず
玉をぶれをなにあをゆく千里哉
この城乃遠ををさよを運籌帷幄中決
勝千里外このゝろをいさゝう祝し
きるをうなりといつり

○

吉野詣記よ曰紹巴とてつくぐの乃よ

んざ〳〵ふうくてこのごろみやこれを
まねし侍りてよるるひるをさとふらひ事
を志うも賀嶋乃やまとの國までみち
をどく〳〵からず芳野乃ちをみるべ
紀よ〳〵いざなひろりさらびとて人く
よいひふるをもなくて出をちぬ時
よ天文廿二年二月廿三日なり
又廿五日そふをこさられ日にあ

れり聖廟御法樂とし〳〵ぐ内裏よ寄り
しもそふい御いとまたまはりてさふ
らもざりそれべ
梅よまり白ひをこせよ八重櫻　公條
かをみよふゝ紀庭乃ちる風　紹巴
うくて一二ゐづゝ中あひ乃中よて百
韻をもりそる
又芳野よて

もろこしの芳野うゑたくもなし　紹巴
れなしかざしの桜いくもと　公條
あ吟百韻をもりぬかくて一夜をあゝ
しろり
又十二日ゆふつゝる山ざくみなせよ
つきにくりいまぐ日ものろれり和漢
一杯をべきとありしうば
雲やいりれ山さくろくるむさくら

迎客　奠　談　春　水無瀬三位
あ光の日やタ乃をもをそうらむ
巳上

○

紹巴冨士見道記ゑ曰ゆ度のんざしゝ
都ゑあり俗て出るゑもあらず初まゑ
て初める所もなし奈良の京をもなれ
て一むうしれあなるうり呂ひ涙れる

橋立玉津嶋いづれも先まと定り称なげら先遠所ゆとてろ内後比江村
竟次奥州
玄仲乃うへも津もなし歌道此書
席は連る曽谷康敬張行をべきなしあ
まをしを秋までなどやりるをあやしみ
あへるに関此東などいふ事まなりて
賢くも聖護院殿聞しめされて

大ひえ此玄さへいうに冨士乃雪
と彼遊付ゆて二百韻可彼遊愚句をも
と作ありられば
玄来てやしるく人をまれ山橋
御入峯を従ーたてまつるぞうりなり
又佛涅槃此日より光岳和尚七廻は千
句をべしとて第一発句とありしうば
花をりふつてたられぬ袖もなし

又蒲生兵衛大夫殿智閑宗祇へ傳受古今れ箱などの事を語りて奥行あるべたなれば

めぐりあひぬ往まき置しを花盛

又白子觀音寺に不断さくらとて名木あり賢鋪白あり彼寺より奥行

のちぞろん玄ゑ水より桜ゥ南

又菜名も近郷喧哢をてむゥひをまち

て月に道喜の宿より入つるにハ舟あまたしゝて尾州へ渡りぬ茨江といふ川嶋を係るもながゥしきん地せり本府といふ所より清須より小牧へつき伯るゝ明院か祢てゝより乗物など國堺ゝいひをゥれ来るに先へも飛脚ありしとて義元など麓まで迎ゝ院出きまへゝ舊識智の友都れ内ゝりん安して旅

れ宿ともさらにたもたず風雅ふかく
ろ深ぬ人さへたのびくへ玄の日秋
乃夜ふひ出るとも盡ざらまず張行
なども発句ふてえんえんう〜於妙寶寺
さたちるもたらぬも花れころ哉
又八橋までも尾州休存玄以なども
らりがてらと行つれまるふあるりふ
も花もなし　杜若といふ発句せよとい

ひられば
杜若かりぬてくらを木陰う那
又冨士淺間社司新宮殿すして
夏れ日も陰をやめぐる冨士乃雪
又伴ひしん前口をさひふせし発句
夕立やしまる雪乃冨士下風
又七夕の手向を苅屋無甚齋すして
哀ちるや星に手向もかり衣

又八日は清水左京亮一舍は
昨日あひ〳〵星崎にとる〳〵泊舟
翌日は長坂弥左衛門去夏八橋にて東
へいそぐ時のぢりはと約諾せ〳〵とて
一杯は
花をゝもみ萩は水行時を忘哉
又岡崎より竹田法印よき酒を求出て
いろくを加齋慶忠はそへたまつり

酔はまぎれて舩をゝ出〳〵て緒川の御
城はて
さはそふやいく百草の花さかり
又宗長巳来宿をせ〳〵瀧坊はて
宿かるもはたなゝかの名殘ゝ那
又座主御坊はて御奥行海藏門はむ
ゝつり海をかくをとゝふゝり
行舟乃入海ゝくを本間ゝ南

又竹田小兵衛とて去年昌叱うりの宿
をもせし人なり庭ゑ葛ちげらせ山さ
とびまる所ゑて
真葛ちゑ庭ゑまゐ虫夢もゞ郷
又阿波手ゝ森門前乃妙勝寺奥ゑ森乃
東ゑ反魂香焼ゑまゑ森下に社あり其
下藪ゑ香のもれ入し瓶あり
聖ゑやあゝでの森乃初ゑ茶

又名月ゑ津志まゑ一足ゑゑゑるを坂
井助兵衛田中ゑ榛木をゑうけいろく
を彼爲持ゑ程稱りて宗牧を弱入に息
孝行の人ゑて社頭へ誘引して夜更ゑ
べ橋れうへゑて月にうそふれて酔中
ゑ犯白
月をこそ都さぞなゑ今夜ゑ郷
巳上

○

九州道ゝ記ゝ曰四月廿六日出雲國うと
いふ所漁人のいへゝまでまりぬ
哀ゝもいまゝ乳をのむあまゝ乃子ゝ
かゝ乃あゝりやゝとなれざるらん
又廿九日きゝ記の社司より発句所を
なれば
卯ゝ花や神乃いがきゝ乃ゆふかつら

又船よのる所よて発句所をなり杉り
ふしぼそゝだをとゝなのりゝれば
郭ゝこゝ乃杉来や浦のなみ
又原どりゝる慈恩寺発句所を庭前よ
楓ゝあるを見て
深山木乃中に夏をやわらかへで
又五月五日出船するゝ社にても一杉
奥行をべきよしよて発句所をなれば

當座よ

うゑ草はねよひうれ行あ座免哉

又十一日豊前國れ柳浦の名主とて発

ら所をせしよ

豊國のゆぐちちるを早苗う南

又十六日筑州れもひ川よて

くるく夜乃蛍やちるべ号ひ川

又六月三日姪濱興德寺玄熊和尚和漢

奥行あるべきとて発ら所をありしよ

風かゝる南をまゝのとぼそう船

社　同　六　月　梅

又八日利休居士へ関白殿渡御ありて

去む〳〵御物語ありて後一杯と催され

て発ら つかゝまつる座きよ〳〵あれば

筥崎八幡れうろを

神代よもこえて涼し　松乃風　玄旨

雲間よりとをき夏山夜の月　杏

ほのゝよもの秋をのゝ面もれて　日野

又廿五日一折張行をべしとて溝口大

炊允所望よ

浪乃音も秋風ちゝ〳〵西れ海

又廿七日関白殿花瓶あまさとり出さ

れて草花をいけられ御座敷よて

俄よ一折催されて発句つゝふまつる

べしすゝあれば

夏草よ花のゝならすたもと哉　玄旨

きゝ〳〵さ夜まの乃さゝろもの月　杏

志ら露れ簾のひまを傳ひきて　由巳

又七月八日周防山口よて本國寺住持

一會興行をべしとてたきりよとゝ免ら

れ侍れ共ちゝらなく其日を逗留して

九日よ

をる月もいま一しほの木間ゝ那
十日山口を出て國府天神へ着てまり
ふの浦ちゝ紀田ゝみまで舩のまゝる
を待て屋をゝぬるに當社ハ供僧圓
樂坊発句所をありて一面なりともつ
らぬべしとて奥行あり入あひ乃時分
より初りて夜半過ほどよ百韻まんど
ろる長時ふね着まるゝ注進あり天

神乃御ゝうらひとて衆徒よろこぶれ
まる

亀わけよまゝこそ風乃たむ事艸

又十二日安藝ハ嚴嶋よて月よなり待
れば出てゐるまで見るに潟干潟滿
目ハ前よかゝりて汀二三町ばかりも
遠近よなりぬ

みゝ志ほゝゝ大海ハ泉ゝ東

と宗祇賢作なり理なる哉まさに大聖院
良政発句所をありて十三日一會あり
當社よかぐみの池といふあれば
新うれを月やうくみ乃いまれ水
又十四日社司棚守左近將監発句所を
なり思ひぐ夢ぬよほとゝぎすだをれ啼夢
れば
秋やまさる山しゐ夢屋ま郭公

か屋うにやつうを
よあるしをべきふ
いろくれ者もと
子息少輔三郎出
指を出して死帰し
又十八日備後れ津
所をなりうれば
名殘ある月やと
かぐもづなみなと紅

又北日播磨ハ室まで行るゝ坂を越たゝやくしといふ在所あり其ちうきなるさに鍋乃嶋といふあれば

淀い者くよき程なれやなべのしま

志やくしを中へ入てみつれば

巳上

○

連歌至宝抄異本ゝ曰発句ゝ百韻のはじめなれば長高く幽玄ゝ仕ゝ様肝要乃事ゝゝ腋ハ句ゝ発句にかひをひてさもやうゝさし出ゝる詞なくうるもし記様ゝよろしくゝ第三ゝ腋ゝいまゝ少し一句ハ仕立をゝけたうくゝ大面うゝ乃方ゝよろしくゝ発句ゝ客人のごとし腋の句ゝ亭主ハごとし第三ゝ相伴のごとし発句腋第三までハ手

本よろしき連歌い
名もたらぬ小草もなさく川邊哉
たゞふゝられ乃秋れ澤水
夕間蓍夢ふる月は略なきて
代三白餐白より第三にいるまで殊
勝なるよし先達ヤ傳ふる所なりとい
つり

東國陣道記ゟ日二月十九日尾州熟田
ゟ社僧雜侯乃次當社の内八釵宮ゟ日
本武尊ゟ物語ありて後餐白
所をありられば
かぞへむいく夜ゝ祢ぬる花ゝ宿
みゆきくて駿府ゟつゝぬ冨士をは
じ先てえ傳りて
なゝくにゝさとまぬ冨士乃ゟ根哉

又甲府にて雪齋宗壽所をありしに

くもなりに月の山こを風もゞ南

巳上

○

連歌比記集に曰第九に二足鹿を連歌

に一筋の矢を射て二つれ鹿をとむる

といふ事あり前句に事の二つ出たらん

にふさはしまさずはん事いかゝしま

しひとりをもりてふさはしかなふ事

を付べし宗砌法師角をいきぐくといふ

句をたたまひしに難句にて滿座とく

こゝろしに行助法師盃を付られ事り

ゑにて有るべし角と戴とにさゝづれ

ひとりにて付事りに第事にれにならふ

歟し

第十一に里の乃き京都へのぼらんと

きる人一里くくれ秀事を弱び數年を
經ても京へいりがゝ〳〵里は松ゝ枝
ゝ川ゝ池ゝと一つ〳〵れ肝要なるものを
見て通りられば早く京へ差ゞごとし
歌書を連歌のた免は見むはきに只その
一部れ肝要乃所のみを見覚て委しく
見ずともあらん欲
第九一は錦の端き連歌に源氏物語を

付る事源氏全部を見る人き百千人に
一人なりきゞ一事のみをきりきりと
も其んえきる所乃源氏をもりて付ん
事錦のきれれごとし〳〵
第十五は養子きとりなし連歌へきと
しもあまらぬ所うはとりなして付べ
きなり人の子を養ひ我子になをゞご
とし〳〵よく取成色〳〵

蓑なきを乃も素面もらし

といふ句より

かる屋との雨乃山吹打りわびて

色も紙公の句なりよくく味ひて見

るべし

第四十三に大的い連歌を付る事も的

を射る同じ前句も的のごとし大的連

歌とて前句も何を付てもとれぬあり

されどもそれよりも上手下手は差別あ

る上手い星へなり下手い霞の外へ

あるなり

んうれしき素よこそあれ

といふ句に

なのひよあふ新枕香にむ免咲て

此前句をうぐひすとの啼とも花をえる

ともいふ屋うよりも付侍れどもんうれ

しれとゝふところ大事なりあひになふ
のゝろ深く考ふべし
いくをび法よ身をい捨らん
とゝふ句よ
恥もなき流れのいさゞ濡りて
元亨玄苷三藏れ流沙に身を沈免し事
ハ早く相應し侍れども恥もなきとゝふ
て法の字をとゞ免きる事二重よ付さ

れば小的になれる連歌なりとヤ侍
るなりとゝふり

○

細川玄旨口傳聞書全集第三第四よ曰
枕玄苷ふ。ひさかたの天とも日とも月
とも星とも雲とも雨とも都ともゝふ
なり。あらか祢の地。あしひきれ山。たま
ほこの道。ちはやふる神。むたまれ夜

ゐゝなくあり。ま。志らぬひのつくし。ゆ
たまもるつくしともいふ。あまさかる
ひな。そらみつ大和。つきねふ山城。うみ
かせの伊勢とも神風のみもとを川と
もいきゝ。ゆ川とも山田ゆ原ともいふ
なり。なまよみの甲斐。うちみをる駿河。
みなゝ多安房。衣手ゆ常陸の國。又衣手
のゝわゝゆ浦。又衣手ゆあゝけの馬。又

衣手のたなゝみ。又衣手乃なをゆ川。さゝ
なみの近江の國。さゝなみの大津とも
志賀とも比良とも。なゝらゆ山とも。石
しゝる神なひ山。又石ばゝる近江乃國
ともいふなり。もゝくゝを彩美濃。八雲た
つ出雲。角さをふ石見。あさもをひ紀伊。
みまむかふ淡路。又みけむつふこゝゑ
の宮。たまもよを讃岐。をや人の薩摩。有

根〻對馬。きよ〻奈良。たゝくらの
三笠れ山。こもりくれ泊瀬。あま小舟
泊瀬ともいふきり。たまきをさう祢ひ
の山。志なてるやゝ片岡山。うまさゝれ三
輪。大口乃まかみゝ原。きく〻なりく〻垣
山。きく〻みこも平郡の山。志もといふ葛
城山。又きくさのかりられ山ともいふ
なり。たまきる内の大殿。もく〻つきふ

いたれ。ぱく〻立れくらむし山ともくら
むし川ともうちあくる佐保。よこもり
の猪ゝひれ岡。ふをまちを引手の山。さ
つ人れゆつれゝ嵩。いめたて〻とみれ
岡。い免人乃伏見細ひれの鷺坂山。たて
なへていりゝこの川。ものゝふれ磐瀬の
杜。又ものゝふ乃八十氏川。さゝをされ
くるさ乃小殿。ゆふ月夜をくらの山。こ

もまくら高瀬乃淀。たしてるや難波。又
あしゝちる難波ともいふなり。たほと
ものみゝ。みたまゝれたゝのみなと
ともいふなり。あせま衣たみ殿の嶋。志ら
菅れま殿。志なゝ多猪名殿。いもゝ意わ
ゝ乃松原。さくら麻の松ふ乃浦。天の原
ふしの志ゝ山。まゝよ引の横山。なゝを引
うなかみゝゝ。に保とゝれゝしゝわ

せ。又塩ゝゝ乃をきなゝ川ともいふな
ゝ。大船のゝゝりけ海。まくらゝ乃こゝ
れわゝゝ。なられふりかしま。又霰ふり
きしみゝ嶽。さ衣のをゝくゝ。ゆゝきく
みたなかみ山。又ゆゝきみ手向け山
ともしらつけ山ともいふなり。こまつ
るきわさみゝ原。ま菅よきそゝれ河原。
古衣まつち山。むらさけの名高乃浦。遠

つくまの浦。つまこめる矢敷れ神山。ひもかゝみのとゝれ山。とゝふ名のあをゝ。
玄の日をかをゝ。かゝら衣きりさゝぬしか
きの吉野あつみ三笠の山。衣衣きな
られ山。あらひ衣とりゝへ川。いもゝ目
をえそ乃崎又妹ゝ手をとりこれ池
又いもゝかみ上さしを敷。玄艸を馬く
ひ山。やきたちをとなゝ山。あゝさゝひ

き敷。玉くしけ二見の浦。あらたまの手
とも玄とも月日ともいふなり。めくえ
きれ大宮。さをたゝの大宮人。うち日さ
を宮。をくろく乃市れ場。をきたへれま
くらとも床とも紬ともいふなり。たく
ふをま新羅。くちらる海。わゝくされ
つま。枕つくつまや。うゝきの久しれ
せ。うゝせみのせ。をみを乃のゆふへ。れ

ほきみれ天れ川原。くりくりの中がけ
ろふ乃ゑとも石ともゆゑへともいふ
なり。といつり
案ずるに聞書全集に一とに古歌を
出して註あり今爰にい考て枕詞のみ
を採摘するものなり古今集季吟註本
第五に定家卿云久うと足引玉ほこち
もやふるかあられつくる事もそと

も山とも乃とも神とも又をといふに
付て日ともあゑとも神といふに付て
賀茂とも平野とも つくるとぞう
ろ〳〵ろえて山上を足を引ちえやをふ
る岩をうちわるとまでも習ひ侶らず
と云云

○

和歌にも連歌にもよみ人志らずといふ

事あり詠歌大槩抄等四ゝ日後人ゝら
ずと書事も當代御門の御製或ハ位あ
る人ゝ歌或ハ下臈乃歌かならず尊人
ならぬ人ゝ作者を走の人勅勘ゝ人乃歌
又ハ佛神の慥ならぬ歌又真實作者を
ゝらざるハ勿論なりさいつり

○

紹巴法眼追善ゝを免七〻四十九日乃
間ゝ玄仍獨吟の七百韻ゝ連歌ありて
の孝思をあらしして今爰ゝ甚もど免
ゝ三句づを写置ものなり

初七日

郭ゝむすをを名殘ゝ郎
入仍ゝなしみどゝ夜乃月
秋ちかゝ萩乃そよぎに爰さめて

二七日

夏は月ふりさけてこそ夜半もなし
ほとゝぎすなくみねの横雲
あやめ草の花はさきそひて

三七日

水は泡は消をあらそふ蛍ゝ車
うき藻はなもなほ乃ゆくを急
川岸の柳はまゞる梅ちりて

四七日

若竹をうゑふしをゝるをゝ兒哉
秋も彩もるさみぢれ乃霧
蛍飛まゞやさなゝらゑぬらん

五七日

五月雨ゝ彩しも降る宿りゝ車
門をむぐら乃葉りをふみち
うゝをきし千歳の竹はかるふきて

六七日

や蟬のをなごら殘る夢もが跡
名をうづもれぬ夏草乃原
沼水はあやめ花ちるかゝりまて

七〻日

たやすしまふを床夏は秋ゝ那
あ事ゑをうらぬゆめはを中
なゞらへていうゑ思む月ならん

巳上

○問云百句選は中ゟ延喜御製ハ付句前
却ぜりめゆ答云句を前後せる事ゟ大
和物語ゟすれゝ物語ゟてゟ公忠一人
の歌なり二句連歌に志ゟる事ハ菟玖
波集を用ひたゞ長句ゟ公忠なり
又問云卅六句選は中ゟわるのゝ
て額をそゆふとある前句ハそのゝ

ろめゆ答云法人は暑るに紙がさし塙
もたぼえなりといふ有人いとくむら
しハ冠に綿を付きり當時乃俗言は冠
にくつをもうせたりといふ其事ならん
乃と云云案ずるは若しそのことなれ
ばわるのうへも第六轉乃上の同然れ
依主釈のうちなり
又問云百談の中は載きるところれさ

まぐろ例ゐもいづれの抄物より出
ぜるぞや答云多分ハ雨夜乃記至要抄
等なり少分ハさく免ごと教訓等なり
又問云同中は師匠なき連歌も労して
功なりといふにかるに定家卿云和歌
無師匠只舊歌爲師といり和歌と連
歌とことなるうめゆ答云ことならず
和歌はも能因法師も長能卿を師匠と

を俊成卿も金吾基俊朝臣を師匠とせ
ず連歌ゑも宗祇宗長も師資なり紹巴
心前も師弟なり定家卿の無師といふ
も得意の妙ハ人ゑをゝへがゝれれい
れなるべゝ或も教訓乃方便にもや
あるらん一槩ゑれもふ屋ゝらずゆゆ
傳あり
又問云同中ゑ肖柏を牡丹花と称する

事産衣と傳記と遠ふといつりは義めゆ
答云まさゝぬ花やんれふかみ艸れ発
るより自他ともゑ牡丹花と称せしも
のなるべゝ八代集奥書ゑ曰右八代集
爲備證本以數本再三令校正之畢文明
第八三月中旬牡丹花判といつり三愛
記ゑ曰津のくにぬなのゝわゝりゑい
りをむをびて夢と号ゝみづゝら牡

丹花をなとせりといつり志うれば逸傳も自称よりより産衣も他称に隨ふならびに相違せざるなり

又問云同中に救済の誹諧とて十郎がかれほどを五郎ぜよといつり菟玖波集にも敬心れ誹諧に十郎がれもひ切なる五郎ぜよとあり相違ゆ答云十論抄主闇記して号ひ違ふなる歟し

又問云同中に載する所乃東花蓮二も同人か別人かゆ答云抄物れ中にて い前師後師なれど別人なり據實通論せば同人なるべし新撰大和詞上巻に三頻の圖あり圖乃れもむきをれば東花蓮二渡狂も抄物にて い前後乃次第あれども者ど轉變の無常にして一せれ上乃三替なれど一人三名なる歟

一十論等も東花の作と古今抄等も連
二れ作なり爲辨抄等も渡狂乃作と芭
蕉存命れ時い支考とヤせ一人なり
又問云同中ないうまゝせんいうゝせん
れ云墨白れ上下にをく事を後ゞて更
まゝ近に弱屋一といつりけ爰ゆ答
云八代集和歌れ中多分もいうまゝせん
の伺い上乃白まありいうゝせんれ伺

い下れ白にあり少分も下の白にいう
ません上乃白まいうゝせんもなり志
かれば和歌まも連歌まも多分少分れ
爰とん得べ紀れ産衣も多分れ説まも
たがゝものなる屋一
又問云同中まも和漢連句に如實知自心
佛こそ我身とれも〻余所ならでとい
つり付和白上まこそとめて下をて

と爲ることゝ為ゆ答云定家卿もとゞ免
俊成卿ゟとひたまつりこそのてゞま
ゟい五音れ第四乃音ゟてれさへて爲
るなり白中のへ文字乱なり次ゟ付白
れ意をヤバ佛こそとも惣ゞて五字の
姿なり我身とれもへとも別〳〵て知自
心れ字なり質多乾栗駄心身れ付合な
ゟ余所ならでとも如實れ字なり文に

金胎因果理智運月等ゟ准知を爲〳〵
又問云同中ゟ三物と中事ゟ文ゟ弱ぬ
爲〳〵といつりそのてろめゆ答云三
物といふゟ誹諧ゟ当用ゟるものなり
若〳〵く誹式ならんゟ連歌ゟゟ外に
見聞なり續類従れ連歌部ゟ出陣萬句
三物といふものあゟ牧弱ぬ爲〳〵
又問云同中ゟ賦物れ事ゟ傳授なき人

いとれ〻〻かるべしといつり去うる
に賦物抄をゝれどもれがゝ記事いこ
れなしめの答云傳授といふも賦れ字
乃ゝを様なる日下武と意得てかく歌
し色則やまとだけの尊を勸請しまる
ゝろなるやや秘事あり
又問云同追加れ中ゝ心敬の云連歌乃
乃に七悪あるといつりさく免ごとゝ

い歌道れ七賊とあるめの答云隨義轉
用れゝろなり
又問云前編の中ゝ在間を何ゝたとつん
といふ短ゝに五字七字〻〻と付まる
を載まり常れ長ゝる短ゝと異り何乃た
免ゝ出せしぞや答云前ゝも一ゝして
後ゝも數多の付様あるといふ事を去
らせんゞき免なり

又問云同中ゑ拾遺集ゑゑ男色ゑ歌一
首ありといふたゝるに貫之の歌ゑ玉
ほこゝろとをゝもこそ人いゆけなと時
れまゝゝねゝ恋しゝとあるを季吟註
ゑ曰此歌恋の部にいれば男色ゑ中ゑ
やといつゝめゆ答云このうたゝ男色
の中と治定なれば二首なり
又問云後編ゑ中ゑ天水抄秘決抄所引
乃東鑑ゑ頼朝ゞゝゝの軍に名取川と
あり菟玖波集ゑゑ初ゑ五文字われひ
とりとなゝ相遠めゆゑ菟玖波集ゑゑ
秀衡征伐のゝ免に奥州ゑむゝひゝる
時といつゝ東鑑ゑゑ泰衡といつゝゝ
遠ひもめゆ答云東鑑ゑゑ文
治五年頼朝乃征伐ゑ泰衡なり菟玖波
集に秀衡といふゑ親の名を出せり推

功歸本れ爲なるべし又頼朝がくふの
軍に名取川乃名寺が閲をる所れ東
鑑よりこれなし更に弱ぬ屋し
又問云同中よりぐらでんといふも何
とやを云歟なるや答云震動雷電なり
林道春れ神社考第五巻に見えたり
又問云同附錄れ中よ新撰菟玖波集乃
作者宗祇といふもよろしからずとい

つりそのこころめを答云新菟玖波れ
作者若し宗祇とせば古菟玖波乃作者
い救濟ととべし既よ志らず救濟宗
祇も撰集の時れちらを合せし人に
して作者よりあらざるなり
又問云れ編の中よ皮肉骨れ三弊を出
をといへどもいまだ三乃事ぢめを
よくんえずその姿めを答云皮もかろ

くゝてやさゝるなり肉をうりくゝ志
くゝて愛あるなり骨をつよくゝて
力れあるなりと意得歟ゝ
又問云同中に高野大師の御歌に わを
れてもまにをむをひそ旅人れといへ
ま風雅集にもわをれてもくをやもり
らん旅人の高野れたく乃玉川の水と
いつり相遠めゆ荅云まにをむをびそ

も手尓波いよく宇えられども勅撰の
集と異なるゆへに見合れを免に出せ
ま若しくい異本ありや粗弱ぬべゝ
又問云連歌れ十代集と和歌の十代集
と同じこと欤荅云遠ふなり連歌乃十
代集といふも八代集に新勅撰集續後
撰集を加へて十代集といふなり連歌
新式にえをり後編に云ゞごとゝ新

勅撰續後撰は二集も上に屬すれば十代集といふなり下に屬すれば十三代集といふなり和歌は十代集といふも八代集乃ちしめは古今集を除て外の七代集に新勅撰續後撰續古今は三代集を加へて十代集といふなり群書一覽撰集部に見えたり

又問云和歌は雜と連歌の雜と同じきや異なりや答云和歌乃雜といふも春夏秋冬神祇釋教慶賀等さまぐまぐなりまるを雜と中なり連歌の雜といふに三種乃差別あり菟玖波集等に雜といふも和歌とは異なる事なり発句帳等に雜といふもまぐまれ句夏の句秋乃句それ句すべて別名なるを雜と中なり付合小鏡等に雜といふも四季は

なれものを雑とやなり百談茶談の中
よ連歌よりも雑の発句なりといふも四
季乃なるべき事とぞ思ふ
又問云和歌は述懐と連歌の述懐とも
遠ふものゝ答云千載集第二十季
吟註に曰述懐も必不足のんだりを
いふよりあらず何事にても我思ひを
のぶることをいふなれば君を安全と

祈るも述懐なり連歌のこゝろとも
かゝるなりといつり色を思ふべし
又問云和歌と連歌と残の字にて四季
はかゝるものゝ答云和歌にては残
花残橘等も夏季なり残菊残雁等も冬
季なり連歌にても残雪残暑は二乃外
に残の字にて季はかゝるものいとれ
なし雁衣等にえ之

又問云連歌よもさ波さゞ波さゞら波
といふ云葉を用るや答云匠材集無言
抄産衣小鏡等よりさなみさゞらなど
といふ云葉をもちられなりといへども後
撰集よりも拾遺集よりもさゞら波と後世
る歌あり詞花集よりさなみとよめる
歌なりもちろんれども初心の人を連歌
に作例れなき事いやをべからず

又問云門松を誹言なり門乃松を連語
なりといふ人ありまことなりや答云
予も前輩よりもちろん承ゆ手引れ糸よも
門れ松と訓じきりもちろんれども堀河百
首乃歌よりも俊惠法師が林葉集の歌に
も門松とよめり百首よ門松をいとな
みこるその程よ云昭かされよや成ぬ
らん林葉集に云よあへるこの門松を

わけ来てわれも千代あんうちに入
ぬるとゝ云云又ゝ歌ぬべし
又問云連歌雜談は戯言にごくつぶし
といふゝ何の事ぞや答云五句潰す
て山伏の事なり山伏ゝ人倫釋教山類
夜分旅なり故に山伏いげれば五句つ
ぶれるなり
又問云草庵集ゝ連歌付合ゝあまた
なれども発句ゝこれなし菟玖波集に
は頓阿の発句ゝ多くひろひ出ゝきり
発句帳ゝ名をかくざれば見分がた
し其外ゝもられありや答云頓阿は聖
廟法樂乃日発句といふもの正月元日
より十二月晦日まで三百六十句は集
一巻あり
又問云紹巴は五百箇條といふもの

れありや答云連歌抄物乃中よりいまだ閲する所なし俳諧古今抄第一第三れ両巻よむらしい宗祇の八十翁紹巴乃五百箇條とあり更に弱ぬ歟し

又問云連歌水月を茶談の中より出さるる事をめゆ答云水月を邪路にあるべして初学れものゝ考えてをあり記書なるゆえに載ざるなり

又問云えらぶれ文字産衣より末の歟にも出してえらぶと書きりそのころめゆ答云八代集ならびに定家卿假名文字遣等にも末れ歟文字を書きるところなし基俊朝臣乃悦目抄公條公の假名遣近道等より末乃歟文字を書たる所もえをきり末れ歟にも出せしい悦目抄等の意況中乃え文字を書しを

多分は侃ふ考さぐひて中のえ文字を
書をよしとせるこゝろなる歟し
又問云詩歌連歌ともに上手なるに
もいかゝあらんよしてゝ稽古もこゝるがよろ
しきそや答云からうさも和歌も連歌
も數寄たまへときこそものゝ上手な
るまれ云云

右は茶談を朝夕嚫茶は雑徒を
寔まかきあり免て跬歩乃輩に
の者なるものなり愚老が婆ん
見をかもみ歟し云云

白雲堂無相

附錄

○抄物作者れ事

一大和物語も在原滋春の作ともいふ

花山院乃御作ともいふ六巻あり

一袋草子も清輔朝臣平治元年の作に

して四巻なり

一愚秘抄も中納言定家卿建保五年れ

作なして本末二巻あり今分て三巻

とゝ
なり

一三五記ゝ藤原定家建保五年の作に
して本末二卷あり本ゝ一二を分て
三卷なり奥書ゝ曰宝治元年爲家文
永六年爲氏永仁三年爲實と云云

一續草庵集ゝ頓阿法師元亨ゝより康安
までの作ゝて五卷あり奥書ゝ曰
此一帖令校合落字等書加之者也明

應二年三月廿一日大納言法印とい
ふ

一無名抄ゝ鴨長明正中元年の作ゝ
て上下二卷あり

一なくさ免草ゝ花洛清巖山科正徹應
永廿五年文月の作ゝて一卷なり

一筑紫道記ゝ宗祇法師文明十二年九
月ゝて一卷なり奥書に曰右此紀

行以兼載法師所持之本令書寫者也
永祿四年長月念日昌叱と云云
一兼載雜談を兼純の記するところに
して一卷あり
一北國紀行を堯惠法印文明十七年の
作をして一卷あり
一廻國雜記を聖護院准后道興文明十
八年六月より翌年三月までの作詩

歌連誹れ雜記をして一卷あり
一あたれ雲を作者をしらず書中和
歌もれほくして一卷あり
一宗祇終焉記を宗長法師文龜二年れ
作をして一卷あり
一宇津山記を宗長法師永正四年の作
をして一卷なり
一東路れつとを宗長法師永正六年れ

作りて一巻あり

一宗長手記に大永二年より七年まで
の事を記しるる書にて上下二巻
あり記文中和歌連歌誹諧ほし

一高野参詣日記に道遥院實隆公大永
三年四月十九日より五月三日まで
の作にて一巻あり

一あつまれ道乃記に仁和寺尊海僧正
の作にて一巻あり神無月廿四日
より同十二月廿三日まで東道中記
なり

一東國紀行に宗牧天文十三年九月よ
り翌年三月まで東作一巻あり書中
詩歌連歌ほし今ちらく連歌の
みかくぜり

一芝野詣記に称名院公條公天文廿二

年二月廿三日より三月十四日までの作にて一巻あり書中詩も歌もたほし

一紹巴冨士見道記も永祿十三年廿作にて一巻あり

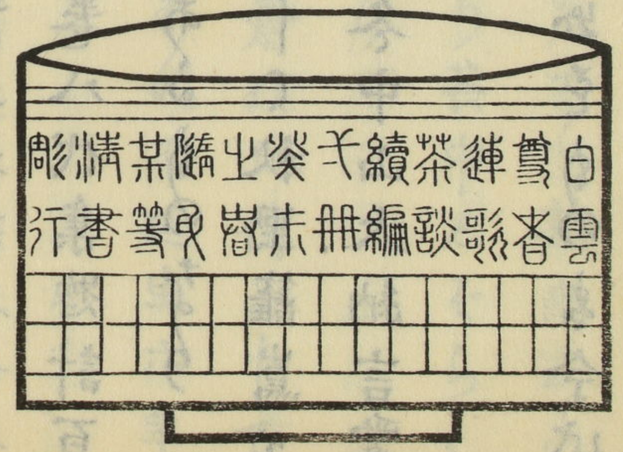
一詠歌大槩抄も細川玄旨法印天正十四年廿作にて六巻あり奥書に曰文祿乙未達天聽云云といへり

一九州道廿記も玄旨法印天正十五年三月初より七月廿三日までの作にて一巻あり

一至宝抄異本も紹巴の作にして一巻あり奥書に曰文祿五年二月元和七年卯月寛永十年三月と云云

一東國陣道記も細川玄旨法印の作にして一巻なり

一連歌比記集も作者も時代もあらず
四十三種の名目をたて指南もと
る書よして一巻あり其中あらく
五種を写置ものなり
一聞書全集も細川幽齋ゟ口傳よして
作者をあらず五巻ありて延宝六年
の梓行なり
一季吟註本も古今八巻後撰六巻拾遺

六巻後拾遺八巻金葉三巻詞花二巻
千載七巻新古今十巻八代集惣計百
八冊よして五十巻あるものなり
一名所圖會も六巻よして秋里籬嶋ゟ
作なり寛政九年乃冬中山大納言愛
親卿ゟ序あり
一前編後編ゟ附錄ゟ出をものも今ゟ
附錄よも略ゟ其のせざるなり

文政六年
上元之日